

平成 28 年高連協 賀詞交歓会

高齢社会 NGO 連携協議会（高連協） 平成 28（2016）年「賀詞交歓会」

日時：2016 年 1 月 12 日（火）午後 3～5 時

会場：銀座ライオンビル 6 階「クラシックホール」（銀座 7 丁目）

司会：鷹野義量理事

ただいまから「2016 年賀詞交歓会」を開かせていただきます。新年のはじめに当たりまして、高連協代表ということで、堀田代表からご挨拶をいただきたいと思ひます。

堀田力代表あいさつ

あけましておめでとうございます。錚々たるみなさま方、年齢に反比例してお元気なお姿にお目にかかれてほんとうに光榮にうれしく思っております。大阪からもNALCの高畑会長にお出でいただきました。ご出席どうもありがとうございます。本来は樋口さんが先にごあいさつされる場所でしたが、姿がみえるところまで前座をつとめさせていただきますけれども。

おととしから始まりましたが、3 年間の期間をもって助け合いで要支援者の生活支援などをやるという介護保険制度の大きな転換がございまして、給付事業を助け合い事業でやるというのは日本の行政はじめてのことだろうと思ひます。わたくしどもは厚生労働省といろいろやりまして、助け合いでやるならしくみをしっかりつくってほしいということで、全国市区町村 1600 いくつに、それぞれ助け合いをつくり出す職責の人を生活支援コーディネーターといておりますが、市町村にまず一人置いて、それを協議体というものが支え、それから地域の生活圏にも一人ずつ生活支援コーディネーターを置いて、これも自治会長やNPOの代表などが協議体として支える。

そういうしくみを30年の4月までに発足させるということで、いま全国を回りました、そういう助け合いを広めるしくみづくりを強力に推進しているところでもあります。動きは鈍かったのですが、厚生労働省もずいぶん協力してくれまして、現在で約700、約半分の自治体が今年中に事業をはじめるといふことで、700のうち2割ぐらひは第一層のコーディネーターを置いておられますし、うち4割ぐらひは第二層の生活圏の協議体、コーディネーターを置いている。そこまで事業は進んでおります。といふことで助け合いを広めるという作業は、画期的な従来なかつた段階にはいっているわけでありませうけれども、実はこのしくみは助け合いの社会参加という観点からみたら、邪道であり危険な道であります。

「助け合い」といふのは市民・住民が自発的に行うものであつて、行政任命のしくみでやると実質的でないいわば仕切られた本物でない助け合いあるいは社会参加になってしまう。これは危険な道、邪道である。

なぜそういう邪道にわれわれは全力をあげて協力しておるのか、それはそれ以外に道がないからであり、そうやる以上はこの制度が歪まない邪道でない本物の助け合い社会参加になるように、任命されるのは行政からですが、任命されたコーディネーターや協議体の構成員が、住民の立場に立ち、住民・市民の心を活かし自発的な助け合いを生み出すように、いかに彼ら彼女らを取り込むか、それがこの制度が危険でなく、大きなプラスになるかならないかの分かれ目であり、だからわれわれは分かれ目に立っている。

今年あたりが山場であり、全力をあげて本物のコーディネーター、協議体構成員になるように接触し、いっしょに手を結んでやっていかなければいけない。そういう段階で全力をあげておるところですが、もちろんわたしたちさわやか福祉財団だけでやれるはずもないのでありまして、これは各地域で助け合い社会参加を広める事業をやってきておられる高連協のみなさま方のあらゆる面でのお力添えをいただかないと実現しない。

原点にかえて考えますと、高連協憲章にしっかり書いてある。高連協は高齢者の自発的な社会参加を促進する団体ですから、この事業は高連協のど真ん中の事業でありまして、しかもそれが危ない道に行くのか、一挙に広げるすばらしい道に行くのかがわれわれにかかっている。その山場である今年、いろんな面で各地域でこういったしくみが生まれてまいります。それぞれの面で存分にお力添えをいただき、力を発揮していただき、この制度が歪んだ危ない制度にならないように、ぜひいっしょにやっていただけるとうれしいと思います。

もう現われると思いますが、樋口恵子さんはこの事業についてしっかりとご理解をいただき、いろんなご助言をちょうだいしていただきまして、ほんとうにたのしい仲間であります。あぶない方向にいかないように、しっかりとご助言していただいております。また高連協では堀内さんが発行しておられる「丈風」という機関誌で、この事業をしっかりした視点でフォローしていただいている。これもたいへん大きな力でありまして、厚く感謝しております。それぞれにいろいろできることがある、高連協の原点の事業をみんなでがんばって進んでいければうれしいと思っております。心からそう願っております。

ご静聴ありがとうございました。

司会：ご歓談中とは存じますが、樋口先生が見えられましたので、樋口先生にごあいさつをいただきたいと思っております。

樋口恵子代表あいさつ

みなさん、あけましておめでとうございます。ことしも元気にいきましょう。

堀田先生から年賀状をいただきまして、「することのあまりに多く寝正月」。

これが堀田さんの年頭の俳句でございます。わたしはただちにお返しをいたしました。「することのあまりに遅く寝正月」。起きて見つ寝て見つ部屋のゴミの多さかな、みたいなものでして。資料を少し片づけようと思って、一時間ほどもそそとやってもたい

して片づかない。そこでひと寝入り。起きてまたやってもたいして片づかなくて、またひと寝入り。そこで「することのあまりに遅く寝正月」。

去年のお正月はわたくしは食中毒になって点滴を打ってのお正月だったのです。しかも5月にはわけのわからない感染症で半月入院いたしまして、それからは本格的に食生活を含めて健康というものをほんとうに大事に考えなければいけないという、83歳のこれからでは遅すぎるのですけれども。それにいたしましてもやはり人間健康がたいせつ、年をとればとるほどに高齢者のだれにもできる社会貢献は、健康寿命の延伸という健康の向上でありますので、それをモットーに今年もやっていきたいと思います。去年よりはましな一年が迎えられそうでございます。

それと去年は、わたしどもは、だれにでもそうなのですけれど「戦後70年」ということで、12月の末にいたしました「討ち入りシンポ」(「歳末東京名物 女たちの討ち入りシンポ」12月12日・日比谷文化図書館大ホール)は、題して「戦後70年、老いて女たちは今 恋するように平和を愛す!」という。

80からではありません。当会には97歳の秋山ちえ子先生、同じく97歳のこちらは元気元気、会場まではいらっしゃらなかったけれど、わたしが伺いましてインタビュアーになりまして、97歳の吉沢久子さん。奇しくもおふた方もこの1月に98になれる同じ年の1月生まれ。すばらしいインタビューでして、そのうち高連協で貸し出して儲けにしようかと思っています。聞いてもいいのですよ、ほんとうに。

「どのように毎日を過ごしておいでですか」と聞いたときの答えは、「あすのためにきょうを準備すること」。それから「あすこの世は滅ぶとも、わたしはきょうリンゴの木を植える」。北ヨーロッパに近い人のことばだっただと思いますけれど、リンゴの木でなくともあすのためにきょう最善の努力をする。そうおっしゃって、最後にいわれたことは、「生涯所得税を納めて死にたい」でした。

97歳の吉沢久さんにくらべますと83歳まだまだ未熟者でございますので、みなさまといっしょに修行を積みまして。高連協としては、きょうも賀詞交歓会をいたしまして、こういう活動をしている、ああいう活動をしているというお話があったのですが、高連協は一人ひとりみんな違うのですから、ばらばらでいい。あっちにいても高連協、こっちにいても高連協、さまざまな形で「高連協万華鏡」、全国いたるところにいや全世界いたるところに高連協見える会の一年にいたしたいと思います。

司会：時間も押しつまってまいりましたので、このへんで今後の高連協を含めて、どういふふうな活動を考えておられるのか、吉田専務からうかがおうと思います。

吉田成良専務理事あいさつ

いいお話をたくさんいただいて、わたくしのたわごとみたいな話を聞いていただきますが、高連協はやることがいっぱいある。ありすぎてパンク寸前の状況というのが高連協の実態です。

「団塊の世代」が5年ほど前からわれわれの仲間入りをしてきたわけですが、この人たちは今の社会の経済状況があまりに悪いのか、やはりボランティアというよりも、もうちょっとインセンティブとして収入のあるしごとをしたい、せざるをえないという方々が非常に多いように、われわれ高連協の役員をやっている人たちからは聞かされておりますし、わたしも感じております。

一方、世の中のほうは「一億総活躍社会」とかっていますが、一億というのは年配の方にはあまりいい響きはありません。2060年ですか、人口が一億人になる。いまのような生み方生まれ方で、そして死ぬ人がこれから30年、40年ほどは増える一方でございます。死亡率が上がる、出生率は見込めない。当然、日本は人口減少時代にはなっております。これは急には避けられないと思います。ただ出生率はもうちょっと上がってもいいんじゃないか。

このあいだ、わたしはちょっと田舎のほうでおしゃべりをしました。相手は「団塊の世代」以上の高齢者でございました。この人たちがいまいちばん気にしているのは次世代のこと、息子のこと娘のことなんです。娘、息子が一人にいる、相手がいない、という時代になっている。わたしはその時にちょっといいました。わたし自身もそうであったように、自分は恋愛結婚をしたつもりなんです、実は先輩の紹介で彼女を紹介されて、半年くらいお付き合いした。そういうことでございまして、実は昔のおとなは若い者の世話を結構やっていた。ところがいまのわれわれはどうなのか。息子、娘は勝手に好きな相手がいて一緒になればいいじゃないかというのが、いまの社会の一般ではないでしょうか、という話をしました。ほとんどの人がそうなので、息子、娘にも人権があるからとか妙なことをいってました。それよりも何よりも、次世代のことをほんとうに心配しているのだろうか。こんな社会にしたのはだれの責任だということになれば、結局は高齢者の責任でもあるというお話をさせてもらったのですが、そんな時代です。

それから東京の区も含めて、江戸川あたりはやる必要ないと思いますが、「地域消滅」ということが自治体の関係者または自治体の自治会長さんなどには非常に大きな刺激になっている。なんとか消滅しないためには、出生率をあげるか、若い人がきてしごとをもって働いてもらうか、ふたつしかない。若い人がしごとをもって働いてくれば出生率はおのずと上がるでしょう。社会的環境をみた場合に、まあ安倍さんという人を最近は見直しているのですけれど、頭がいいと思います。「女性活躍社会」、まあ北欧では30年も前にできていた話なんですけれど、遅ればせながらやるということで、ここ2年ほど「地域創生」というようなことでやっておられますけれど、いま地方でやっていることは出生率を上げること。そこで高齢者は何ができるのか。地域社会というのは高齢者ばかりなんです。わたしも含めて土日に行き交うのは高齢者ばかり、普通の日もそうですが。そういう時代になっているわけです。

堀田さんのお話ではないけれど、高齢者がいま何らかの社会的な活動をやらないでどうするんですか、時代また社会がそれを問うているんだと思います。だから漫然とわれ

われ高齢者、とくに高連協は過ごすことができない時代にはいっちゃったのだと思っております。

そんななかで高連協は、80代の人もいれば、きのうきょう高齢者になったばかりの新参の人がいる。この人たちは考えることが違います。これは当然だと思います。人生が違う、ばらばらになって広がっている高齢者のニーズがどのへんにあるのか。

高連協こそが、このへんの世代の人はこんなことを考えている、いちばん望んでいるのはこういうことです、ということ世に知らしめていく。ことしも参議院選挙もありますし、その前に高連協が大々的に調査をして、高齢者自身が何を求めているのか。高連協の調査というのは退職高齢者が中心ですが、この人たちは最近自信を失っている。中産階級から落ちこぼれつつある。そのへんのところをきちんと調査して、80代以上の人はどう考えているのかとか、70代はこんなことを望んでいるのかとか、60代の「団塊の世代」の人は社会環境としてこんなことをほしいと思っているということ、ある程度の数字をいただいてまとめていくのが、いま高連協が求められている目先のしごとかなと思っております。

よけいなことをだいぶ申しあげましたが、いま悩んでいることなものですので、高連協の実情でもあると思っておりますので、樋口先生またよろしく願いいたします。

(文責 堀内正範)

訃報: 高齢社会 NGO 連携協議会専務理事、一般社団法人エイジング総合研究センター代表理事 吉田成良殿は、2016年1月21日(木)午後7時29分に、虚血性心不全により享年80歳にて永眠されました。(高連協事務局より通知)